

P. ラーゲルクヴィスト

バラバ

尾崎 義 譯

BARABBAS

AV PÄR LAGERKVIST

IWANAMI GENDAI SŌSHO

岩波現代叢書

バ ラ バ

尾 崎 義 譯

岩波現代叢書

パ ラ バ

岩波現代叢書

1953年4月7日 第1刷發行
1953年12月15日 第3刷發行

¥ 180.

譯 者 お ぎ よし
 尾 崎 義

東京都千代田區神田一ツ橋2ノ3
發行者 岩 波 雄 二 郎

東京都青梅市根ヶ布385 精興社
印刷者 山 田 一 雄



發 行 所 東京都千代田區 株式 岩 波 書 店
 神田一ツ橋2ノ3 會社

落丁本・亂丁本はお取替いたします

精興社印刷・永井製本

彼らがどんなふうにあの十字架の上に垂れさがっていたか、また彼の圍りに誰々が集っていたか、それが彼の母マリアとマグダラのマリア、ヴェロニカ、十字架を擔いだクレネのシモン、それに彼を布で巻き包んだあのアリマテアのヨセフであったことなどは、誰でも知っている。ところが、僅かばかり離れて丘の斜面の下の方に、少し横にそれて、一人の男が立っていた。そしてあの上で十字架に垂れさがって死んだ彼を絶えず見守り、彼の斷末魔を始めから終りまでじっと眺めていた。その名をバラバといった。この書はその男のことを書いたものである。

三十位の男で屈強な體つきだが、皮膚は黄色がかって青白く、鬚は赤味がかっていたが、頭髮は黒かった。眉毛も黒く、眼が深く凹んでいたのも、まるで眼光が成るべく隠れようとしているかのようであった。片方の眼の下には、鬚で見えなくなっていたが深い創痕があった。だが人間の容貌などは大して意味はない。

彼は總督法廷からずっと街々を、ほかの人たちから少し遅れ、離れて群集について來たのであ

った。そして疲れきったラビ（ユダヤの律法師の尊稱）が十字架の下に崩れるように倒れたとき、彼は足をとどめ、その十字架のある前方へ進み過ぎないように、しばらく立ち止っていた。すると連中はあのシモンを代りに引っ張ってきて、十字架を擔がせたのであった。群集のなかにはローマ兵を別として餘り男は多くなかった。この死刑囚についてきたのは主に女たちと、それに誰かが磔刑はりつけになるため街を引き廻されるとき、いつもついてきては面白そうに騒いでいた子供たちの一團とであった。だが子供たちは直ぐに倦き、ほかの連中の中から歩いてきた片方の頬に長い創痕のあるあの男の方をちょっとみやると、また自分たちの遊戲に戻っていった。

こうしていま彼は刑場の丘の上に立って、中央の十字架に垂れさがっている男を眺めていたが、その男から眼をはなすことができなかった。この邊りは何から何まで穢れていて、汚穢が充満していたので、彼は本當はこの上までやってくるつもりは少しもなかったのだった。もしこの不吉な強い魔力のある場所に足を踏み入れると、きっと誰でも自分の何ものかがそこに取り残され、もう一度そこへ戻らざるを得なくなるが、そのときはもう二度とそこから出られなくなってしまう、というのであった。髑髏や骨がそこら一面に散らばっていた。それに倒れて半ば腐った十字架もあったが、もう使うこともできないのに、ここでは誰も何一つとして手を觸れようとはしなかった。運び去られないでいた。バラバはなぜここに立っていたのか。彼はあの男を知らな

かったのだし、あの男とは何のかかわりもなかったのではないか。放免された彼、その彼はこの
ゴルゴタに何の用があったのか。

磔刑にされた彼の頭は垂れさがっていて、重苦しく呼吸していた。もう餘り長くはなかった。
それは決して頑丈な男ではなかった。體は痩せていて弱々しかった。腕はこれまで何の仕事にも
使われたことがないように細かった。妙な男だ。鬚は薄くまばらで、胸には少年のように全く毛
が生えていなかった。バラバはこの男に好感がもてなかった。

城内廣場で初めてあの男をみたときから、何か知ら不思議なところがある男だ、とバラバは思
っていたのだった。それがどういふことなのか、彼は口には出していえなかった。ただ彼が感じ
たものなのであった。こんな人間はいままでに見たことがない、と思ったのだ。彼は牢屋から出
てきたばかりで、眼がまだ光線になれてはいなかった、といふことの所爲も恐らくあったと思
われたが。だから初めのうちは彼には、その男がまるで眩い光にとりかこまれているように見え
た。しかし勿論その光は直ぐに消え失せてしまい、彼の視覚が平常になり、廣場にただ一人立っ
ていたあの男のことだけではなく、すべてのことが判ってきた。それでもなお彼は、その男には
何か非常に不思議なものがある、普通の人間とは違っている、と思った。そしてその男が囚人
であり、自分と全く同じように死刑の宣告をうけていたのだといふことは、彼にはどうしても理解

できないことのようにであった。彼にはそれが腑に落ちなかった。自分に關係があるというのではなかったが——一體どうしてこんな裁きができたのだろうか。あの男には罪がないことは、明白だったではないか。

そういうわけでこの男は磔刑にされるために引き出されたのであった——そして彼の方は枷を解かれ、放免されたのであった。勿論これは彼にはどうすることもできないことであつた。それは連中の決めることなのであつた。連中は誰でも勝手に選ぶことができたのだし、全く彼らの自由にやれることなのだった。そしてこんな結果になつてしまつたわけである。二人とも死刑囚で、そのうちの一人が放免されることになつていた。彼自身でさえ、連中の選擇振りを意外に思った。鐵鎖を解かれたとき彼は、もう一人の男が兵士たちにはさまれて城の拱門を出ていつて姿が見えなくなるのを見送つたが、その男はもう既に十字架を負つていた。

彼は立ち止つて空虚な拱門の向うを眺めていた。すると番兵が彼を小突いて、こう怒鳴つた。何をじろじろ見てるんだ。とつと出ていけよ。放免なんだぜ、お前は。すると彼は我に還り、同じ城門を通り抜けて外へ出た。そしてもう一人の男が十字架を曳きずりながら街を向うへ歩いていくのを見ると、そのあとをつけていつたのだった。なぜだか、彼には判らなかつた。あの男とは何のかかわりもないのに、なぜ幾時間もここに立つて、磔刑の様子やあの男の長い斷末魔を

みていたのか、それも判らなかった。

向うの十字架の圍りに集って立っている人たちは、別にここにいる必要もなかったのではないか。自分たちで望んだのでなければ、その必要はなかったのだ。この上までついて来て不淨に穢れることを、彼らに強制するものは何もなかったのだ。しかし恐らくはそれは身内の者や親しい友人たちであつたのだろう。穢れることなどを頓着しない様子であつたのは、不思議だつた。

あの女は多分彼の母なんだろう。彼には似てはいなかったが。でも誰が彼に似ることができたであろうか。彼女は百姓女のような風采だつた。無愛想で粗野な。そして今にも泣きだしそうになつていたので、垂れてくる鼻や口のあたりを、ときどき手の甲で撫でていた。だが彼女は泣いてはいなかった。彼女の歎きようはほかの人たちと同じ風ではなかったし、彼の方を視つめる眼もほかの人とは違つていた。だから恐らく彼の母だつたろう。彼女は誰にもまして最も彼に憐憫の情を感じていたことと想像されるが、それでも彼がそこにそうして垂れさがつていたことや、彼が磔刑になるようなことを仕でかしたことを非難しているようであつた。たとえ彼がどれ程清淨で、潔白であつたとしても、とにかく磔刑にされるようなことを、何かしたのであろう。そして彼女はそれを容認することができなかったのであろう。彼に罪がなかったことは、母である以上は當然彼女も知つていたのだ。彼がどんなことをしたとしても、彼女は矢張り彼を無罪だと思

ったに違いない。

バラバの方は母はなかった。それに大體からして父もなかった。父のことなどかつて耳にしたこともなかったのだ。また身内とても一人もなかった。彼の知っている限りでは一人もなかった。だからもし磔刑になったのが彼だったとしたら、こんなに大層な愁歎場にならなかったろう。あの男の周囲でみられるようにはならなかったろう。あの人たちは胸を叩いて、まるでいままでこんな悲しい目に逢ったことがなかったかのような態度であった、そして終始烈しい號泣と歎息だった。

あの右手の十字架の上の男は、バラバが顔見知りでよく知っていた。もしバラバがこの下に立っているのがその男に見えたなら、彼は恐らくバラバは自分のために、自分が苦しんでいるのを見るためにそこに立っているのだ、と思ったことであろう。勿論バラバはそんなことをしてはいなかった。そんなためにここにやって來ていたのではなかった。といって、奴が磔刑になるのを見ることには、別に異存はなかった。もし誰か死に價する奴があるとすれば、正にその惡黨がそれなのだ。奴は惡黨の故に裁かれたのではなく、何か全く別のことで裁かれたのではあったが。

だが、なぜバラバは奴の方を視ていたのだろう——ためにここまでやって來た眞ん中の男、彼の代りにああして垂れさがっている男の方を視ないで。バラバをここまで來ずにはおかせなかつ

た、そしてバラバに對して何か不思議な力をもっていた彼。力だって？ 力無しに見えるものがあつたとすれば、あの男こそ正にそうではなかったか。十字架の上でこれ以上惨めなぶらさがりようをする者はほかにはないだろう。あとの二人は少しもそんなふうには見えなかったし、あの男のように苦しんでいるふうにも思えなかった。その二人の方がずっと體力に餘裕があつたことは、見ても判つた。ところが彼の方は、頭を眞直ぐに支えるだけの力もなく、それは全く低く垂れていた。

すると彼はどうやら頭を少しばかり持ちあげ、瘦せ衰えた毛の生えていない胸を押しあげた。そして喘いだ。舌が乾ききつた唇の上に動いた。彼は喉が渴いた、とか何とか呻きながらいった。少し離れて丘の下で横になつて骰子遊びをやっていた兵士たちは、磔^{はりつけ}刑になつた者が仲々死んでしまわないのにうんざりしていて、それが耳にはいらなかった。しかし身内の一人が下りていて兵士たちにそう告げた。兵士の一人は厭々ながら起きあがると、海綿を土瓶^{がめ}に浸し、それを桿^{きざ}の先につけて彼の方へ差しのべたが、彼は自分に差し出された泥水の味を嘗めてみて、嫌だといった。するとその意地悪の兵士は平氣な顔をして、嘲笑した。そして同僚たちのところへ戻ると、みんなでひっくり返つてそれをあざけり笑つた。そこな惡鬼ども！

身内の者だか何だか知らないが、彼らはせつなさそうにあの哀れな十字架上の男を見あげた。

彼は幾度か喘いだ、そして彼がいまにも息絶えることは明かであった。これ以上の苦しみを逃れることができるよう、直ぐにでも臨終が来た方がずっとよかつたろう。この下の方に立っていたバラバ、彼もそう思っていた。ただもう終ってくれさえすれば！ 濟んでしまえば直ぐに彼はこの場から大急ぎで立ち去り、二度ともうこのことを考えないつもりだ！

すると突然、丘の上全體が、まるで太陽がその光を失ったかのように、暗くなり、ほとんど闇のようになった。そして暗黒のなかで十字架上の男が大聲で叫んだ「神よ、わが神よ、なぜおん身はわたしをお棄てになったか」その聲は怖いように響いた。何の意味で彼はそういったのか？ また、なぜ暗くなったのか？ これは白晝のことではなかったか。全く不可解のことだった。三本の十字架が向うにただぼんやりと見えるだけで、薄氣味の悪い狀景であった。慥かに何か恐しいことが起っていたに違いない。兵士たちは駆け登って行って、めいめいの武器をつかんだ——何事にもせよ、兵士はいつも飛んで行って武器をとるのだ。彼らは槍を手に十字架の圍りに立ち列んだ、そして驚いてたがいに囁きあっているのを、バラバは聞いた。彼らは怖いのだ！ もう嘲笑どころではなかった！ 勿論彼らは迷信家だった。

彼自身も怖かったのだ。そして少しばかり明るくなり始め、すべてが平常になりかけてきたときには、嬉しくなった。丁度朝方のように徐々に明るくなってきた。太陽の光が丘や周圍の橄欖

樹の上に擴がり、靜まりかえっていた小鳥が再び囀りだした。それは全く朝のようだった。

丘の上の身内の人たちはじっと立っていた。もう彼らからは泣き聲も歎きも聞えてこなかった。ただ立って十字架の上の彼を見あげていた——兵士たちでさえ彼を見あげていた。萬物は靜まりかえったのだった。

もうバラバは思うようにどこへも行けたのだ。一切は終ったのだから。そして太陽はまた照り輝き、すべては平素のままであった。彼が死んだのでちょっとの間、暗くなっただけであった。そう、彼は立ち去ろうとした。立ち去ろうとしたことは明かだった。ここに止っている理由はもう何もなかった。あの男が死んでしまったいまとっては、これ以上ここに止っている理由はもうなかったのだ。彼らはあの男を十字架からおろした——バラバは立ち去る前にそれを見た。二人の男が彼をきれいな麻の布に包んだ——これも彼は目撃した。體は眞白だった、そして彼らはその體に少しでも痛みを與えたり、何か苦痛でも加えることがないかと心配するかのように、注意してその體を取扱っていた。彼らは奇妙な素振りをみせていた。何といつてもとにかく彼は十字架にかけられたり色々なことをされたりしたのではないか。いかにも不思議な人間たちだった。だが母は泪も流さない眼でそこに佇んで、自分の息子であったものを視つめていた。そして荒削りの憂愁な顔は彼女の悲しみを表現することができないように思われ、ただいままでの出來

事が何のことやら合點がいかない、納得することができない、といったことしか表わせないようだった。彼女のごときは、彼にはずっとよく理解できた。

彼らがバラバから少し離れたところを一緒になって通りすぎ、男たちが布に包んだ遺骸を運び、女たちが悲愴な行列をつくってそのあとに續いていったとき、女の一人が彼の母にそっと囁いた――バラバの方を指しながら。彼女はふと立ち止って、寄邊ないやるせなさといふ程にみちた視線で彼を眺めた。そのため彼は、あの視線は一生忘れられないだろう、と思った程であった。彼らはゴルゴタ街道をおりていって、それから別の道を左へ曲った。

バラバは彼らに氣付かれないように、可成り離れてあとをつけていった。少し向うの或る菜園へくると、彼らは死骸を岩にくり抜いた墓のなかに置いた。そして墓のそばで祈を捧げてから、その入口に大きい石を轉がし、そこを立ち去った。

すると彼もまたそこまでやって来て、しばらく立っていた。だが彼は祈らなかった。彼は罪人であつたし、ことにその罪が贖われていない以上、彼の祈は聞きいれられなかったであろうから。しかも彼は元々この死者を知ってはいなかったのだ。とにかく彼は、そこにしばらくただ立っていたのだ。

それから彼もまたイエルサレムの方へ歩いていった。

彼はダヴィド門のなかを這入って街を少し歩いていくと、兎唇女みつくちに出會った。彼女は家並にそってすれすれに歩いてきて彼を見ない振りしたが、彼には女が自分を見たことや、もう二度と彼に逢うことを豫期していなかった様子が判った。多分女は彼が磔刑はりつけになったと信じていたのだらう。

彼は女のあとをつけていった。そしてやがて彼女のそばまで追いついた。こうして二人は顔を合わせたのだった。こんなことにならなくてもよかったのだ。彼は何もその女に言葉をかける必要はなかったのだった。だから彼自身でも言葉をかけたことを意外に思ったのである。彼が氣が付いたところでは、女も意外に思つて驚いたようだった。彼女は仕方なしに彼の方へ物怖じするような視線を投げた。

二人はめいめいの考えていることについては語らず、彼はただ女に、どこへ行くつもりだ、ギルガル(ユダヤの地名)から何か音信たよりがあったか、と訊ねた。彼女は必要以上のことは何も答えなかった、

そして例の通り舌足らずの喋りかただったので、女の話すことは聞きとりにくかった。別にどこへ行くというのでもない、とのことだった。そしてどこに住んでいるのかと彼が訊ねると、彼女は何も返事をしなかった。彼は女の着物が下の縁の邊りでぼろぼろに裂けていて、汚い幅の廣い足には何も履いていないことに氣がついた。二人の話は、ぎれ、二人は何も喋らないでただ列んで歩いていった。

ある一軒の家に眞暗い洞穴のようにあいている戸口の奥の方から、騒々しい人聲が聞えてきた。そして丁度二人がそこを通りすぎたとき、一人の背の高い太っちょ女が飛び出してきて、バラバに怒鳴るように呼びかけた。その女は酔っぱらっていた。そして彼の顔を見ると有頂天になり、喜びの餘り太い腕を振り廻し、直ぐそのまま彼を家のなかへ引っ張り込もうとした。彼はためらいながら、自分が變な同伴者を連れていることをちょっとてれているようだった。だが、その女は彼を引っ張って、二人を家のなかへ追い込んだ。薄暗がりのなかへ這入ると、彼は二人の男と三人の女から大聲で迎えられた。しかし彼はしばらくたって眼が暗がりになれてくるまで、その男や女が視えなかった。彼らは夢中でバラバに卓子テンプルのそばの席を與え、酒をついでやって、口々に喋りたてた。バラバが牢獄から出てこれたことや、放免された話、それにもう一人の方の男が彼の代りに磔はりつけ刑になったとは、何んとバラバは運が良かったんだろう、などと！ 彼らは酒とバ

ラバの幸運にあやかりたい欲望とに溢れていた。その幸運を自分たちの體へ移そうと、バラバの體に觸れたりした。そして一人の女は彼の胴着のなかへ手をつこんで、彼の毛深い胸にさわった。これには太っちょ女も喉も裂けんばかりに笑いこけた。

バラバも彼らと一緒に酒を飲んだが、餘り多くは喋らなかった。彼はもっぱら坐ったまま、隠れたい程に深く落ち込んでいるあの黒味がかった褐色の兩眼で眞正面を視つめていた。バラバはちよつと變だ、と彼らは思った。彼だつて勿論、ときには變なこともあったのに。

女たちは彼に酒をどしどしついだ。彼はまたそれを飲むと、連中に喋らせていたが、自分では餘りその對話に口を出さなかった。

仕舞に彼らは、バラバはどうしたのだろう、なぜあんなふうなんだろう、と訝りだした。だが、あのでかい太っちょ女は彼の頸に腕を巻きつけながら、あんなに長い間牢屋の洞穴に繋がれてい
たんだし、死んでも同然だもの。だつて死刑を言渡されたら死んだと同じなんだからね。あと
で放免され、赦されたといつたつて矢張り一度は死んでしまったのさ。だつてこの人、何んとい
つたつて死んだ人なんで、ただ死人のなかから生き返えてきただけなのよ、わたしたちと同じ
ようにして生きてるのは話が違ふわよ、だからこの人にしてもさ、變にならざるをえないとい
うことぐらい、判りそうなんだね、といった。そして彼らがその女のお喋りを冷やかすように

笑ったので、女は怒って腹を立て、バラバと兎唇女みづくちのほかはみんな追い出してやる、といった。女はその兎唇女みづくちがどの誰やら知らなかったが、少し足りないようだがおとなしくて氣立が良さそうだ、と思った。二人の男は女が自分たちに向ってこんな喋り方をしたことに、腹が痛くなる程笑い續けたが、やがて落ちつくと言面目になって、バラバとひそひそ話を始めた。今晚暗くなったら直ぐに山へ戻るんだ。仔羊を供えようと思ってここへやって來ただけなんだ。連れて來た仔羊が駄目だったので、それを賣り飛ばして文句のない鳩を二羽、代りに供えたんだが、金が餘ったんで、それでこの太っちょ女の家で遊んでいたわけなんだ、と。二人はバラバに、いつ山の方へ戻ってくるつもりなのか、と訊ね、いまどの邊りの山に集っているか教えた。バラバは判った、と言って頷いたが、返事はしなかった。

女のうちの一人は、バラバの代りに磔刑はりつけになった男のことを喋りだしていた。その女は、一度ただちょっと通りすぎていくだけだったが、その男を見たことがある、といった。その男は學問のある人で、そこら邊りを歩き廻って豫言したり不思議なことをしたりしていた、と世間では話しているというのだ。それは別に悪いことではないし、ほかにもそんなことをする人は大勢あるんだからね。だからあの人が磔刑はりつけになったのは勿論なにかほかのことだよ。痩せ男だったよ、それだけしか覚えていないわ。するともう一人の女がいうには、わたしその男を見たことはない